

著：安部 正敏

憧鉄雑感

皮膚科医による痛快！鉄道エッセイ

書評者：岡崎布佐子（岡山市立市民病院皮膚科）

日本皮膚科学会の会員で、安部正敏先生を知らなければ、モグリである。安部先生の講演のない学会に参加すること自体難しい。また、日皮会が毎年発行しているキャリア支援のニュースレターで半ば連載化している「安部正敏のコレ！」を読んだことのない会員はいないだろう。「安部正敏のコレ！」で明らかのように、読書家の安部先生が、有り余る筆力で『皮膚科の臨床』に連載したエッセイが単行本化されたのが、『憧鉄雑感』である。事の起こりは、『皮膚科の臨床』にユーモアのあるエッセイの連載を掲載しようと思った当時の担当Iさんが、ライバル誌(原文ママ)に掲載されていた安部先生のコラムを見てオフアしたことだった。今回、この原点となったコラム2本も『臨床皮膚科』から転載されており、『臨床皮膚科』とは因縁浅からぬ本である。

この本の問題は、本屋に行ってもどの棚に置いてあるかわからないことである。金原出版の本なので医学系の棚になるのか、鉄道系の棚になるのか、はたまた旅行記エッセイ等の棚になるのか。それは、この本が読む人によって多様な楽しみがあるためだろう。

エッセイとしては、「勉強に疲れた際の「息抜き」の役割を仰せ

つかっており」とあり、診療の合間や当直中のふと空いた時間に読むのに最適である。ふっと笑いを誘い、緊張していた頭の力が抜け、ささくれた時間が和む。私は日直中に、修学旅行のしおりをつくる中学生の安部少年とその友達の話やニコリともせずコーヒーを配るストックホルムの女性の話を読んで、ふっどころか声を出して吹き出してしまった。

患者への説明や説得に苦戦している若い先生方は、頓珍漢な患者に振り回される大先輩の姿を読んで、力づけられるだろう。他方、大学最後の乾癬外来の日、患者に惜しまれる安部先生の姿にはほろっとさせられ、この本には一臨床家として医療に向きあう安部先生の姿がある。

鉄道部門を読むときには、願わくはネット端末や鉄道地図等を用意されたい。毎回安部先生の手による貴重な写真、今はもう撮影できない懐かしい写真等、があるものの、紙面都合上毎回1枚だけなので、さらに詳細な情報が欲しくなる。折しも自由な移動が制限されている今、『憧鉄雑感』片手に日本中の鉄道の旅を夢想することができる。いや、現地に行っても見ることでできないシステムや車両等、読者は現実よりも多角的な旅ができる。その情報量は膨大

で、『憧鉄雑感』内の鉄道情報を全て習熟したところには、コロナは治まっているだろう。

もう一つ、私だけの楽しみかもしれないが、安部先生の日本語力に学ぶ楽しみがある。日本語ペラペラを自認している私だが、安部先生の文章に接する度、読めない漢字、知らない言い回しに遭遇する。国語辞典と漢和辞典、ことわざ辞典も必要である。今回も早々に、「犬一代に狸一匹」に遭遇し、辞書のお世話になった。その後も読めない漢字、書けない漢字満載で、一々付箋を貼っていたら、本が付箋だらけになり、隣の席の内科の先生に、真面目に読んでますねえと感心された。

本屋に行き、『憧鉄雑感』がどの棚に置いてあるか探していただきたい。置いてある棚でその店員のセンスがわかるというものだ。首尾良く見つけたら、手に取って少し読んでいただきたい。その時は、くれぐれも声に出して吹き出したりしないよう注意してください。

● A5・頁296 2020年9月
定価：2,750円
(本体2,500円+税10%)
[ISBN978-4-307-00489-3]
金原出版刊